



千変万化の対応力と 揺るぎない芯を持ち合わせた音楽

ロシアのレパートリーを世に多く紹介
協奏曲で魅せる丁々発止の快演

筆者にとって、アレクサンドル・ヴェデルニコフは、長らく録音の中だけで知る存在であり続けた。とりわけ、あまり知られることのないロシアのレパートリーを精力的に紹介してくれる存在として、いつも「勉強」の対象として聴いていたように思われる。グリンカの《歌劇「ルスランとリュドミーラ」》全曲を（序曲だけでなく！）初めて聴いたのは、ポリショイ劇場との録音であった。リムスキー・コルサコフの《見えない町キーテジの物語》を映像で観たのも、イタリア、カリアリのリリコ劇場で収録されたヴェデルニコフのそれが初めてだったと記憶している。

最近でも、協奏曲の録音でこれはすごい、という演奏にはヴェデルニコフの名がクレジットされていることが多い。2006年のルガーノ音楽祭、ライブ録音では、アルグリッチやナカリャコフを相手に、ショスタコーヴィチの《ピアノ協奏曲第1番》で丁々発止の快演を繰り広げている。シンフォニア・ヴァルソヴィアと共演し、ボリス・ベレゾフスキーを独奏に迎えたチャイコフスキーの《ピアノ協奏曲第2番》（《第1番》ではなく！）は、近年演奏の機会が増えたこの作品の、再評価のきっかけを作った録音としてもっと知られてよい。

今月のマエストロ

アレクサンドル・ヴェデルニコフ

Alexander Vedernikov

文◎広瀬大介 | Daisuke Hirose

さまざまな個性をもつ本プログラムを ときかせてくれるのか

そんなヴェデルニコフがどんな指揮をするのか、どのようにオーケストラをドライブするのか、この10年ほどNHK交響楽団に定期的に客演してくれるようになって、如実にわかるようになってきた。直近の2016年10月には、定期公演Cプログラムでドヴォルザークの《チェロ協奏曲》とチャイコフスキー《交響曲第6番「悲愴」》を披露した。この時のソリストはアレクサンドル・クニャーゼフ。ベレゾフスキーとはまた違った意味で個性の強い演奏家ではあるが、ヴェデルニコフはそういう独奏者を迎えると、完全にピッタリ伴奏に徹するというよりは、むしろオーケストラをあおるタイプに豹変するようで、実に手に汗握る演奏になった。《悲愴》では第2楽章から第4楽章を続けて演奏し、重心を深く取ってゆったりと音楽の歩みを進めていた。

作品によって、共演者によって、千変万化の対応力を見せつつ、その芯には揺るがぬ大河のごとき音楽の流れが存在するヴェデルニコフなればこそ、今回もさまざまな個性をもつ作品の組み合わせに期待が高まる。若い頃から来日を重ね、近年ではスクリャービンの独奏作品などの録音を精力的に続けているアンドレイ・コロベニコフとは、そのスクリャービン《ピアノ協奏曲》を披露する。この作曲家ならではの色彩感が燦めく注目の演奏となるだろう。第1楽章にベートーヴェンの素材を引用したとされる

グラズノフの《交響曲第7番「田園」》も、いまなお聴く機会が多いとはいえないスクリャービンの再評価を促すような演奏になるはずである。

[ひろせ だいすけ／音楽評論家]

プロフィール

1964年、モスクワ生まれ。モスクワ音楽院を卒業後、1988年からモスクワ放送交響楽団（現チャイコフスキー交響楽団）でウラディーミル・フドセーエフのアシスタントを務める（後に第2指揮者）。1995年に創立されたロシア・フィルハーモニー交響楽団で芸術監督・首席指揮者に就任し、2004年まで活動。2001年から2009年には、ボリジョイ劇場の音楽監督・首席指揮者として、ロシアの作曲家を中心とした数々の作品を積極的に上演し、公演の質を大きく高めた。2009年6月の来日公演では、チャイコフスキー《エフゲーニ・オネーギン》を指揮している。2009年からデンマーク・オーデンセ交響楽団の首席指揮者、2018年6月より名誉指揮者。2018年9月よりデンマーク王立歌劇場の首席指揮者を務める。世界各地の一流オーケストラや歌劇場への客演も多数。日本では東京二期会のヴェルディ《マクベス》に客演し（2013年5月）、札幌でのパシフィック・ミュージック・フェスティバルでは客演指揮者を務めた（2013年7月）。N響との共演は、2009年、2011年、2014年、2016年に引き続き、5回目となる。[広瀬大介]



© Oleg Nishin

優美で温かな《くるみ割り人形》で 円熟のマエストロが見せる新境地

N響との共演を重ね 十八番のロシア音楽を披露

ウラディーミル・フェドセーエフとNHK交響楽団との初共演は2013年5月であった。両者の相性がよほど良かったのであろう。その後、マエストロは、2015年4月、11月、2017年2月、5月、2018年7月と、N響との共演を重ね、ムソルグスキー、チャイコフスキー、グラズノフ、ボロディン、リムスキー・コルサコフ、ラフマニノフ、ハチャトゥリヤン、ショスタコーヴィチなど、^{おはこ}十八番のロシア音楽を披露した。特に今年7月の九州・沖縄公演では、直前の大雨の被害にあった九州の人々のために、チャイコフスキーの《組曲第4番「モーツァルティアーナ」》から〈祈り〉を捧げた。そして今年12月の定期公演に再び登場する。80歳を超えたロシアの巨匠の至芸にたびたび触れることができるのは、幸運というほかない。

昨年のコンサートで見たフェドセーエフは、足取りもしっかりしていたし、棒を持たずに指揮するその指の動きは繊細で、年齢を感じさせなかった。指先で音楽を掴み取り、作品をじっくりと描いていく。ハッとするような弱音表現が素晴らしかった。

ロシア音楽での説得力はいうまでもない。フェドセーエフは、1974年以来、モスクワ放送交響楽団（現チャイコフスキー交響楽団）の芸術監督・首席指揮者を務めている。現在のメジャー・オーケストラで、40年以上、ひとりの指

今月のマエストロ

ウラディーミル・フェドセーエフ

Vladimir Fedoseyev

文◎山田治生 | Haruo Yamada

揮者が音楽監督や首席指揮者を続けているという例はほかにはないのではないだろうか。そして、彼が長年手塩にかけてきたチャイコフスキー交響楽団は、まさに「ロシア」という響きを奏でる。その一方で、N響と手掛けるロシア音楽には、フェドセーエフの新たな境地が示されているように思われる。

マエストロからのクリスマス・プレゼント 《くるみ割り人形》の魅力を堪能する

今回のプログラムは、チャイコフスキーの《バレエ音楽「くるみ割り人形」》。《くるみ割り人形》はバレエ団の12月の定番演目だが、オーケストラのコンサートで全曲が取り上げられるのは珍しい。この季節にふさわしい、主人公クララの家のクリスマス・イヴを描く第1幕とお菓子の国の饗宴^{きょうえん}が舞台となる第2幕。チャイコフスキーを熟知したマエストロが魅力満載の《くるみ割り人形》^{たんのう}全曲を堪能させてくれるに違いない。フェドセーエフは、1986年にモスクワ放送交響楽団と《くるみ割り人形》全曲の録音をしている。その演奏はドラマチックかつ優美。自然体で温かい。今回のコンサートではより円熟した表現が聴けるであろう。

〈アラビアの踊り〉〈中国の踊り〉〈トレパーク〉〈あし笛の踊り〉〈花のワルツ〉〈こんべい糖の精の踊り〉などだれもが知る名曲が並ぶ第2幕が有名だが、第1幕の〈クララとくるみ割り人形〉や児童合唱の入る〈雪のワルツ〉は特筆さ

れる美しさであり、〈くるみ割り人形とねずみの王様〉での描写的な表現も面白い。

フェドセーエフ & N響の《バレエ音楽「くるみ割り人形」》は、マエストロからのこの上ないクリスマス・プレゼントとなるに違いない。

[やまだ はるお／音楽評論家]

プロフィール

1932年、レニングラード(現サンクトペテルブルク)生まれ。グネーシン音楽アカデミーで学び、モスクワ音楽院でレオ・ギンズブルクに師事。1974年、ゲンナジー・ロジェストヴェンスキーの後任としてモスクワ放送交響楽団(現チャイコフスキー交響楽団)の芸術監督および首席指揮者となる。以後、同楽団を40年以上にわたって率いている。1997年から2004年まではウィーン交響楽団の首席指揮者も兼務。これまでに、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、バイエルン放送交響楽団、クリーヴランド管弦楽団、ポリジョイ劇場、マリインスキー劇場、ウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、ローマ歌劇場、チューリヒ歌劇場などに客演。

NHK交響楽団とは2013年5月定期公演でショスタコーヴィチの《交響曲第1番》などを指揮して初共演。その後、2015年4月、11月、2017年2月、5月に客演し、ロシア音楽を中心とするプログラムを披露。2018年7月には九州・沖縄公演を率いた。[山田治生]



古楽からモダンまで幅広い音楽を手がける マエストロがN響初登場

従来の伝統や特質を踏まえながら
柔軟なスタイルを形づくる

今回、NHK交響楽団の指揮台に初めての
ぼるトーマス・ヘンゲルブロックは、20世紀末か
ら、さまざまなディスクを介して、「歴史的情報
に基づく解釈」によるピリオド・アプローチを行
う音楽家として日本でもその名が知られてい
た。21世紀に入り、フル・サイズのモダン・オー
ケストラを盛んに指揮して注目を集めるようにな
ったが、2012年5月に本人に話をうかがった際
には、「日本では、私の普段の活動状況はあまり伝
わっていないと思います。バロック音楽のイメージ
が強いのではないですか?」と笑顔を浮かべなが
ら問いかけてきたことをよく^{おぼ}えている。確かに、あのアーノクールが率
いたウィーン・コンツェントゥス・ムジクスのメン
バーを務め、フライブルク・バロック管弦楽団や
バルタザール・ノイマン合唱団を立ち上げた経
歴を考えれば、バロック音楽を得意にしている
という見立ては間違いではないだろう。しかし、
本人は、「バロック音楽の専門家というのは正確
ではなく、私の場合、どのレッテルも貼ることが
できないほど、幅広い活動をしてきた自負があり
ます」と語っていたことが印象に残っている。

北ドイツで生まれ育ったヘンゲルブロックが、
11歳の時に初めて北ドイツ放送交響楽団(現在
のNDRエルプフィルハーモニー管弦楽団)を聴
いた時の指揮者は、ハンス・シュミット・イッセ

今月のマエストロ

トーマス・ヘンゲルブロック

Thomas Hengelbrock

文◎満津岡信育 | Nobuyasu Matsuoka

ルシュテットだったとのこと。それ以来、ヴァントを聴き、その後^{けんさん}に音楽家として研鑽を積む過程で、ドラティ、バーンスタイン、ショルティ、コンドラシンといった人たちと出会い、さまざまな影響を受けながら成長したことを忘れてはいけな^いだろう。ヘンゲルブロックは、モダン・オーケストラの指揮者として、従来の伝統や特質を踏まえながら、ピリオド・アプローチに基づく柔軟なスタイルを形づくることに成功しているのである。

マエストロの持ち味が発揮される オール・バッハ・プログラム

ヘンゲルブロックには、若い頃から一貫して、バロック音楽、古典派、ロマン派から同時代の音楽まで、幅広い音楽を手がけてきたという自負がある。今回のオール・バッハ・プログラムも、そうした彼の持ち味がいかんなく発揮されているのが特徴だ。なかでも、シェーンベルクが腕によりをかけてオーケストレーションした《前奏曲とフーガ 変ホ長調「聖アン」》を取り込むなど、ひとひねりしたラインナップになっているのが興味深い。また、ラストの《マニフィカト》(クリスマス用挿入曲つき)では、ヘンゲルブロックが創設し、彼が理想とするコンセプトを実現してきたバルタザール・ノイマン合唱団が登場するのも楽しみだ。そして、なによりも、彼へ2度目にインタビュー取材した際に、「機会があれば、ぜひ日本のオーケストラを指揮してみたい」と目

を輝かせながら語っていたことが、筆者が予想していた以上に早く、しかも、N響定期公演で実現されることを喜ぶたい。

[まつおか のぶやす／音楽評論家]

プロフィール

1958年、ドイツのウィルヘルムスハーフェン生まれ。ヴァイオリン奏者としてキャリアをスタートさせ、ルトスワフスキやカーゲルといった作曲家やドラティのもとでアシスタントを務めた。1985年にフライブルク・バロック管弦楽団の設立に加わり、1991年にバルタザール・ノイマン合唱団、1995年にはバルタザール・ノイマン・アンサンブルを創設。1995年から1998年までドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団の芸術監督、2000年から2003年までウィーン・フォルクスオーバーの音楽監督、2011年から2018年夏までNDRエルプフィルハーモニー管弦楽団(旧北ドイツ放送交響楽団)の首席指揮者を歴任し、現在はバリ管弦楽団のアソシエート・コンダクターを務めている。コンサートに加え、オペラの分野でも活躍している。知られざる名品の紹介にも積極的に取り組んでいる。

「歴史的情報に基づく解釈(HIP=historically informed performance)」に教条的に固執することなく、モダン・オーケストラを指揮する際には、多彩なアイデアを盛り込んで、音楽を生き生きと形づくっていく手腕が高く評価されている。NHK交響楽団とは、今回が初共演である。[満岡信育]

PROGRAM

A

第1900回

NHKホール

12/1 土 6:00pm

12/2 日 3:00pm

指揮 | アレクサンドル・ヴェデルニコフ | 指揮者プロフィールはp.11

ピアノ | アンドレイ・コロベイニコフ

コンサートマスター | 伊藤亮太郎

スヴィリドフ

組曲「吹雪」

—プーシキン原作の映画から[28']

- I トロイカ
- II ワルツ
- III 春と秋
- IV ロマンس
- V パストラール
- VI 軍隊行進曲
- VII 結婚式
- VIII ワルツの残響
- IX 冬の道

スクリャービン

ピアノ協奏曲 嬰へ短調 作品20[29']

- I アレグロ
- II アンダンテ
- III アレグロ・モデラート

— 休憩 —

グラスノフ

交響曲 第7番 へ長調 作品77「田園」
[35']

- I アレグロ・モデラート
- II アンダンテ
- III スケルツォ:アレグロ・ジョコーソ
- IV 終曲:アレグロ・マエストーソ

Artist Profile

アンドレイ・コロベイニコフ (ピアノ)



アンドレイ・コロベイニコフの知的好奇心や人間への関心は深く、露、英、伊、エスベラントの語学や文学のほか、10代前半から法律を学び続けている。ピアニストとしてのレパートリーもパーセルから同時代までと幅広いが、その中心はドイツとロシアの音楽にある。ベートーヴェン、スクリャービン、ショスタコーヴィチに関しては、CD録音でも特別な愛着を示してきた。

1986年、ロシアのモスクワ市近郊、ドルゴブルドニに生まれたコロベイ

ニコフは5歳でピアノを始め、8歳のとき初めてのリサイタルを行った。モスクワ音楽院を卒業後、ロンドンの王立音楽大学でも学んだ。2004年にモスクワのスクリャービン国際ピアノ・コンクール優勝、翌年にロサンゼルス・ラフマニノフ国際ピアノ・コンクールで第2位となるなど、数多くの入賞歴をもつ。室内楽にも熱心で、チェリストのアレクサンドル・クニャーゼフやヨハネス・モーザー、ヴァイオリニストのヴァディム・レービンやドミトリ・マフチン、ボロディン四重奏団ほかと共演を重ねる。

N響とは7年半ぶりの共演となり、旧知の名匠アレクサンドル・ヴェデルニコフとの得意のスクリャービン演奏に期待がかかる。

〔青澤隆明／音楽評論家〕

Program Notes | 高橋健一郎

今回の公演はオール・ロシア・プログラム。日本では演奏される機会の少ない楽曲だが、どれも「これぞロシア」と思わせるような要素に^{あふ}れている。ロシア音楽の新たな魅力を伝えてくれるとともに、連綿と続くロシア音楽の伝統を再確認させてもくれるだろう。

スヴィリドフ

組曲「吹雪」―プーシキン原作の映画から

この作品ははじめロシアの詩人・作家プーシキンの小説『吹雪』を題材にした映画のために書かれた。小説の舞台は19世紀初頭のロシアの田舎。身分の違いゆえに結婚を許されない若い男女が、教会で勝手に結婚式を挙げてしまおうとするが、当日ひどい吹雪のために、計画が狂い、運命を^{ほんろう}翻弄される物語である。

ゲオルギー・スヴィリドフ(1915～1998)はショスタコーヴィチに師事した作曲家で、1950年代頃からロシア的な性格の強い音楽を目指すようになっていった。1964年に映画『吹雪』の音楽を書き、その後1973年から1974年にそれを編曲し、独立した組曲とした。その音楽は、国民楽派的な雰囲気をもち、19世紀のロシアの農村の風景をありありと伝える。

第1曲〈トロイカ〉は、ロシアの冬の大地を駆けるトロイカ(三頭立て馬車)の^{そり}櫓の音と御者の歌。第2曲〈ワルツ〉は、田舎の屋敷で踊られるワルツであろう。第3曲〈春と秋〉は、前半で優しい春のモチーフが奏され、後半はほぼ同一のモチーフが短調となる。第4曲〈ロマンス〉では、19世紀のロシア・ロマンス(歌曲)の抑揚をもつ旋律がメランコリックに、時に情熱的に紡がれていく。第5曲〈パストラール〉は、素朴なメロディが透明な響きを醸し出す。第6曲〈軍隊行進曲〉では一転して勇壮な音楽が管楽器によって奏され、第7曲〈結婚式〉では再び静かになり、絡み合う弦楽器の旋律が神秘的な雰囲気を生む。第8曲〈ワルツの残響〉では第2曲の〈ワルツ〉が追憶のように奏でられ、第9曲〈冬の

道〉では、第1曲〈トロイカ〉のイメージが戻ってくる。なお、最初と最後のそれぞれ2曲ずつは映し鏡のようで、組曲全体が小説のように表紙と裏表紙をもつようである。

作曲年代	[映画版] 1964年 [組曲版] 1973～1974年
初演	[映画版] 1965年2月10日(ソ連邦にて初公開) [組曲版] 1974年と推測される
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2(E♭クラリネット1)、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、タンブリン、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、大太鼓、グロッケンシュピール、ハープ2、ピアノ1(チェレスタ1)、弦楽

スクリャービン

ピアノ協奏曲 嬰へ短調 作品20

アレクサンドル・スクリャービン(1872～1915)はモスクワ音楽院ピアノ科出身のピアニストであり、作曲家としてもまずはショパン風のピアノ小品の創作から出発した。その後、「神智学」の影響のもと、独自の和声語法を目指して変貌^{へんぱ}を遂げ、最終的には神秘的な総合芸術を目論^{もくろ}むようになる。この《ピアノ協奏曲》は、そのように変貌する前の作品であり、明らかにショパンの影響が色濃い。しかしながら、そこには左手の広い音域や、異なるリズムの組み合わせ、繊細な音の動き、独特な官能的響きなど、スクリャービンらしさもすでに濃厚に現れている。

1896年にピアノ譜を数日で一気に書きあげたが、オーケストレーションに手間取り、リムスキー・コルサコフやリャードフら先輩作曲家の助言を受けながら1897年に完成させた。

第1楽章 アレグロ、嬰へ短調。オーケストラの短い導入部の後すぐピアノが登場する。叙情的で不安げな第1主題と、ややおどけたマズルカ風の第2主題からなる。展開部はこの対比を中心に進むが、次第に第1主題の叙情的で劇的なイメージが優勢となる。

第2楽章 アンダンテ、嬰へ長調。甘美で素朴な主題と5つの変奏からなる。主題は12歳頃に作曲されたものとされる。主題を奏するのはオーケストラのみ。第1変奏でピアノが装飾を加え、第2変奏ではテンポが上がり、第3変奏は葬送行進曲となる。第4変奏は繊細な装飾が特徴的。最後は第1変奏とほぼ同じ内容で締めくくられる。

第3楽章 アレグロ・モデラート、嬰へ短調。ポロネーズ風の勇ましい第1主題と、歌心^{あふ}に溢れた叙情的な第2主題からなる。最後は長調に転じ、華々しく閉じられる。

作曲年代	1896～1897年
初演	1897年10月23日(旧ロシア暦10月11日)、作曲家自身のピアノ、ワシーリ・サフォノフの指揮、ロシア音楽協会オデッサ支部の演奏会
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽、ピアノ・ソロ

交響曲 第7番 ヘ長調 作品77「田園」

アレクサンドル・グラズノフ(1865～1936)は19世紀末から20世紀にかけて交響曲やバレエなど多くのジャンルで活躍した作曲家である。幼い頃からリムスキー・コルサコフに作曲を師事し、「ロシア五人組」の後継者的な立場から出発したため、当初は民族色の強い明朗快活な音楽が特徴的だった。全9曲の交響曲(《第9番》は未完)のうち、《第6番》まではそのような傾向が強い。しかし、6曲の交響曲を完成させて国際的な名声を築いた頃、グラズノフは自分の創作を顧み、新しい技法を模索するようになった。グラズノフはモダニズム音楽には基本的には否定的な態度をとり、従来の音楽観を大きく変えることはなかったものの、それまで試してこなかった新しい技法を用いることで自分の音楽をより豊かにしようとしたのであった。

その際に大きな影響を与えたのは、1890年代から親交を深めていたセルгей・タニエエフだった。対位法の権威として知られるこの作曲家の影響を強く受けたグラズノフは、対位法を駆使し、音楽を理性的にポリフォニックに構築する傾向を強めるようになっていった。この《交響曲第7番》は、民族色は残しつつも、その方向性が強く現れた楽曲となっている。

第1楽章 アレグロ・モデラート、ヘ長調。調性やリズム、いくつかの楽想がベートーヴェンの《田園交響曲》を思い起こさせる。形式面の密度が高く、複雑なテクスチャを持ちながらも、牧童の笛の優しい音や楽しげな踊り歌が聞こえてくるなど、全体的に穏やかな楽想が支配的である。

第2楽章 アンダンテ、ニ短調。サラバンドあるいはシャコンヌ風の金管で始まり、厳粛な雰囲気生まれる。途中、半音階的な旋律が対位法的に処理されたり、フーガ風のもチーフが挟まれたりする。

第3楽章 スケルツォ：アレグロ・ジョコソ、変ロ長調。再び民衆の音楽の要素が戻ってくる。楽しげに踊りに興じるロシアの田舎の人々の様子が描かれているようである。

第4楽章 終曲：アレグロ・マエストロ、ニ短調。堂々たるフィナーレは、いわば総括的な楽章である。これまでの3つの楽章のモチーフを総動員し、複数のテーマと対位法的に関わらせるなど、さまざまな処理を施している。最後は金管によりクライマックスが築かれ、全体的に壮大で祝祭的な雰囲気となる。

作曲年代	1901～1902年7月
初演	1903年1月3日(旧ロシア暦1902年12月21日)、作曲家自身の指揮、サンクトペテルブルクの貴族会館で行われた第2回ロシア交響楽演奏会
楽器編成	フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、トライアングル、シンバル、大太鼓、ハープ1、弦楽

B

第1902回

サントリーホール

12/12 水 7:00pm

12/13 木 7:00pm

指揮 | ウラディーミル・フェドセーエフ | 指揮者プロフィールはp.13

児童合唱 | NHK東京児童合唱団★(合唱指揮:間谷 勇)

コンサートマスター | 篠崎史紀

チャイコフスキー

バレエ音楽「くるみ割り人形」作品71

[90'] (休憩時間を含まず)

序曲

第1幕

第1場

- I クリスマス・ツリー
II 行進曲
III こどものギャロップと新しいお客の登場
IV 踊りの場(ドロッセルマイヤーの贈り物)
V 情景とグロース・ファーター踊り
VI 情景(クララとくるみ割り人形)
VII 情景(くるみ割り人形とねずみの王様)

第2場

- VIII 情景(松林で)
IX 雪のワルツ★

—— 休憩 ——

第2幕

第3場

- X 情景(砂糖の山の魔法の城で)
XI 情景(クララと王子)
XII ディヴェルティスマン(嬉遊曲)
a. チョコレート(スペインの踊り)
b. コーヒー(アラビアの踊り)
c. お茶(中国の踊り)
d. トレパーク(ロシアの踊り)
e. あし笛の踊り
f. ジゴニーヌおばさんとピエロ
XIII 花のワルツ
XIV パ・ド・ドゥー(序奏—ヴァリアシオン(第1)タラン
テラーヴァリアシオン(第2)こんぺい糖の精の
踊り—コーダ)
XV 終わりのワルツと大詰め

Artist Profile

NHK東京児童合唱団(児童合唱)

1952年3月、「少年少女に豊かな心を」という願いから、NHKの教育番組と子ども番組の充実に目的として創立されたNHK東京児童合唱団(旧称・東京放送児童合唱団)は、NHKの放送出

演はもとより、海外の合唱団との交流や国内の主要オーケストラと共演を重ねている。また邦人作曲家への合唱作品の委嘱など、多くの作品を国内外に紹介している。

「コダーイ・ゾルタン生誕100年記念国際合唱コンクール」青少年部門第1位・総合部門グランプリなど国内外の多数のコンクールに入賞。2009年N響とともに「天皇・皇后両陛下ご成婚50周年ご即位20周年記念コンサート」に出演した。新国立劇場などオペラへの出演も多数。2012年には創立60周年を迎えた。

2010年からN響とたびたび共演を重ね、今年10月の「NHK音楽祭2018」でもパーヴォ・ヤルヴィ指揮、オルフ《カルミナ・ブラーナ》で共演した。

[柴辻純子／音楽評論家]

Program Note | 千葉 潤

クリスマスの物語のせいで、どうしても年末の子供向けバレエと思われがちな《くるみ割り人形》だが、これは紛れもなくチャイコフスキー（1840～1893）の傑作であり、《スペードの女王》や《悲愴》と並んで、作曲者晩年の作風がしっかりと刻印されている。舞台なしの演奏会形式で、じっくり「音楽作品」として聴きたい。

チャイコフスキー

バレエ音楽「くるみ割り人形」作品71

《くるみ割り人形》の原作は、ドイツの幻想小説作家E.T.A. ホフマンによる『くるみ割り人形とねずみの王様』である。しかし、バレエの台本は原作の物語を大幅に省略しており、実際の上演では、削除されたディティールを再び演出に盛り込むことも少なくない。元来、この物語は自分の子供を幼くして失ったホフマンが、知人の子供たちに即興的に語り聞かせた話に由来すると言われ、第1幕で子供たちにクリスマス・プレゼントを贈る「ドロッセルマイヤー叔父さん」の役は、ホフマン自身がモデルと考えられる。

チャイコフスキーも、このお伽話^{とぎばなし}に切実な意味を見出したひとりである。旅行中に読んだ新聞記事で、彼は実妹アレクサンドラの死を知る。彼女は早くに亡くなった母親の代わりにチャイコフスキー家を支えてきた人物であり、嫁ぎ先の家庭はチャイコフスキーにとって第二の故郷であった。妹の死をきっかけに、チャイコフスキーは幸福だった幼年時代の思い出をこの物語に重ね合わせたに違いない。2か月間の欧米旅行から帰国した彼は、1か月足らずでバレエの下書きを終えてしまうのである。

心に痛みを負ったホフマンやチャイコフスキーが、このお伽話に託したものは何なのだろうか。革命前の帝室舞踊学校でロシア・バレエの薫陶を受けた振付師ジョージ・バランシンの次の言葉は印象的である。「人間はその発達の最高の段階で子供に近

づくというドイツ人の考えが、彼(チャイコフスキー)は好きでした。……あらゆる人のなかで最良の、最も重要な部分とは、子ども時代から残っているものです」(『チャイコフスキーが愛』、新書館)。まさにこの言葉通り、オペラの間人臭さや交響曲の形式的な約束事を逃れた《くるみ割り人形》の世界は、喜びに満ちた純粋な音の戯れであり、永遠の子供時代へのオマージュである。

作曲にあたり、チャイコフスキーは、舞踊曲の多くにフランスやドイツの民謡を引用している。また2つの幕の間には、旋律や調による詳細な対応関係があり、全体が音楽的にも内容的にも統一されている。以下、あらすじに沿って聴きどころを挙げていこう。

第1幕はクリスマス・パーティが行われるジルバーハウス家の客間が舞台。前半は、日常世界を表すモーツァルト風の音楽と、クリスマスに胸躍らせる子どもたちの非日常性を表す管楽器中心の音楽(金管による〈行進曲〉等)が鮮やかな対比を見せる。パーティは盛大な〈情景とグロース・ファーター(お爺さん)踊り〉(シューマンのピアノ曲《ちょうちょう》でお馴染みの古いドイツの舞踊曲)でお開きとなり、子守り歌風の音楽が後につづく。

時計が真夜中を告げると、息の長いクレシェンドに合わせてクリスマスツリーが巨木に成長し、異界への扉が開く。戦争音楽のミニチュアのようなくるみ割り人形とねずみの王様の戦いが繰り広げられ、人形を救った主人公クララの勇気を讃える壮大な音楽がクライマックスを形成する。最後は児童合唱の素朴な歌にハープやグロッケンシュピールが加わる幻想的な〈雪のワルツ〉で結ばれる。

童謡風の〈砂糖の山の魔法の城〉で始まる第2幕では、意外な楽器の音色によって非日常性が演出される。組曲としても有名な〈ディヴェルティスマン〉では、各民族の様式化された舞曲に特徴的な楽器が配され、やがてホルンの音色が匂い立つような〈花のワルツ〉となる。第2幕の締め括りはこんぺい糖の精とコクリューシ王子による〈パド・ドゥー〉(4曲)であり、最初の〈序奏〉では、単純な下行音階を何度も繰り返しながら圧倒的な盛り上がりで到達する(第1幕最後に対応)。(〈こんぺい糖の精の踊り〉では、煌びやかなチェレスタとほの暗いバス・クラリネットの音色の対比がユニークだ。いよいよ〈終わりのワルツと大詰め〉で幕が降りようすると、突然オーケストラがオルゴールのような響きで童謡風の旋律を回想し、美しい夢から醒めた後の切なく名残惜しい気分と共に結ばれる。

作曲年代	1891年から1892年にかけて
初演	1892年12月18日(旧ロシア暦6日)、ペテルブルクのマリンスキー劇場
楽器編成	フルート3(ピッコロ2)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、グロッケンシュピール、タンブリン、タムタム、ラチェット、カスタネット、シンバル、トライアングル、大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、おもちゃのラッパ(トランペットで代用)、おもちゃの太鼓、銃声(ムチで代用)、時計の鐘、ハープ2、チェレスタ1、弦楽、児童合唱

C

第1901回

NHKホール

12/7 金 7:00pm

12/8 土 3:00pm

指揮 | トーマス・ヘンゲルブロック | 指揮者プロフィールはp.15

合唱 | バルタザール・ノイマン合唱団(合唱指揮:デトレフ・プラチュケ)

独唱 | バルタザール・ノイマン合唱団メンバー

アグネス・コバッチ[□](ソプラノI)、バーバラ・コゼリ[■](ソプラノII)、
 フィリッポ・ミネッチア[◇](アルト)、ミルコ・ルートヴィヒ[◆]、ヤン・ペトリカ[○](テノール)、
 ラインハルト・マイヤー[●]、ティロ・ダールマン[△](バス)

コンサートマスター | 篠崎史紀

バッハ

組曲 第4番 二長調 BWV1069 [20']

- I 序曲
- II ブーレ I—II
- III ガヴォット
- IV メヌエット I—II
- V レジュイサンス

バッハ(シェーンベルク編)

前奏曲とフーガ 変ホ長調 BWV552

「聖アン」[16']

——休憩——

バッハ

マニフィカト 二長調 BWV243

(クリスマス用挿入曲つき) [35']

- I わが魂は主をあがめまつり
- II わが心は喜びに耐えず[■]
- [挿入曲A] 高き天より
- III それはおん召使の卑しさを[□]
- IV 見よ今からのち永遠に
- V 全能であられるおん方よ[●]
- [挿入曲B] 喜んで、声を上げよう
- VI そのあわれみは^{◇◆}
- VII みずからおん腕の力を現し
- [挿入曲C] いと高きところには栄光、神にあれ
- VIII 権力のあるものをその座からおろし[○]
- IX 飢えた人々を良いものに飽かせ[◇]
- [挿入曲D] エッサイの若枝から^{□△}
- X そのしもべ、イスラエルを
- XI われらの先祖に言われたように
- XII 父と子と聖霊に栄光あれ

バルタザール・ノイマン合唱団(合唱)

1991年に指揮者トーマス・ヘンゲルブロックによって、ドイツを中心とするヨーロッパの精鋭を集めて結成された合唱団。団体名は、建築物のみならず彫刻や庭園まで含めて総合的に設計したドイツ・バロック期の建築家ヨハン・バルタザール・ノイマンに由来する。1995年に結成された同名の古楽器アンサンブルとともに、ヘンゲルブロック指揮のもと音楽学の研究成果等を演奏に採り入れ、モンテヴェルディからバッハに至るまでの声楽曲をレパートリーとしてきた。

さらに、ロマン派の作品や現代曲にもレパートリーを広げ、ヨーロッパを代表する合唱団として高い評価を受けている。近年は、ヘンゲルブロック以外にも、パブロ・エラス・カサドやアイヴァー・ボルトンが定期的に指揮するほか、ヨーロッパ各地の音楽祭への出演など、活動の幅を広げている。2014年にはアンドラーシュ・シフ指揮のベートーヴェン《莊厳ミサ曲》でルツェルン・イースター音楽祭に出演、今回が待望の初来日。N響とは初共演となる。

[柴辻純子／音楽評論家]

Program Notes | 樋口隆一

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685~1750)の作品のみで定期公演が構成されるのは、近年ではめずらしい。しかもプログラムは、冒頭に管弦楽曲、つづいてオルガン曲、最後に管弦楽伴奏による声楽曲が置かれ、バッハの全貌が聴かれる意欲的なものだ。「20世紀のバッハ」ともいわれたアルノルト・シェーンベルク(1874~1951)によるオーケストラ編曲の冴えも楽しみたい。

バッハ

組曲 第4番 二長調 BWV1069

バッハが活躍した18世紀前半のヨーロッパでは、管弦楽曲はイタリア起源の協奏曲と、フランス起源の管弦楽組曲に大別される。バッハの真作として認められているものとしては、前者が《ブランデンブルク協奏曲》(BWV1046~1051)をはじめ、ヴァイオリンやチェンバロのための協奏曲が多数残っているのに対し、管弦楽組曲は4曲しかないうえ、自筆譜も残っておらず、すべてライプツィヒ時代(1723~1750)ないしは作曲者の死後に作成された筆写楽譜によって伝えられている。とはいえ、4曲ともに非常に魅力的な作品であり、特に第3番の〈アリア〉や、第2番の〈ポロネーズ〉は、バッハの全作品の中でも最もポピュラーな作品となっている。なお「管弦楽組曲」というジャンル名は現代の命名であり、当時は「フランス風序曲」を意味する「ウーヴェルチュール(Ouverture)」というタイトルが使われていた。

《第4番 ニ長調》の場合、冒頭の序曲が1725年12月に初演された教会カンタータ《われらの口を笑いで満たし》(BWV110)の冒頭合唱に改作されているために、少なくともそれ以前に作曲されたことは明らかである。オーボエと弦楽器による初期稿が存在し、トランペット3本とティンパニは、カンタータへの改作を機に追加されたと考えられる。初期稿の成立は、様式的観点からケーテン時代(1717~1723)ないしはそれ以前のワイマール時代(1708~1717)に遡るとも考えられている。

第1曲はフランス風序曲で、ゆったりしたグラヴェの間に9/8拍子のフーガが置かれている。第2曲は2つのブーレだが、第2のブーレではファゴット独奏の活躍がめずらしい。第3曲ガヴォット、第4曲メヌエットとフランス風の舞曲が続き、第5曲レジュイサンス(喜び)が、陽気に全曲を締めくくる。

作曲年代	1723年以前
初演	1723年以前、ワイマールまたはケーテンの宮廷にて
楽器編成	オーボエ3、ファゴット1、トランペット3、ティンパニ1、弦楽、通奏低音(チェロ1、コントラバス1、オルガン1)

バッハ(シェーンベルク編)

前奏曲とフーガ 変ホ長調 BWV552「聖アン」

バッハは数多くの前奏曲とフーガを作曲しているが、この作品のみを1739年に出版した『クラヴィア練習曲集第3部』に収め、前奏曲とフーガを切り離し、曲集の冒頭と末尾に置いている。そのことは、バッハがこの作品を「前奏曲とフーガ」という鍵盤楽器のためのジャンルにおける代表作と見なしていたことを意味している。

アルノルト・シェーンベルクは、1874年にユダヤ人の靴屋の息子としてウィーンに生まれている。学歴は実業学校中退。ほとんど独学で作曲を始めた。標題音楽的な弦楽六重奏曲《浄められた夜》(1899)で注目を集めるが、保守的なウィーンではむしろ否定的な意見が多かった。さらにゲオルゲの詩による《架空庭園の書》(1909)の無調の世界は、当時の音楽界の理解を超えていた。しかしアルバン・ベルク(1885~1935)やアントン・ウェーベルン(1883~1945)を育てるなど、作曲教師としては早くから大きな成果を収め、『和声学』(1911)の出版によって音楽理論家としての地位を固めた。独学のシェーンベルクにこのような成功をもたらしたのは、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスといった古典的作品の徹底的な研究だった。特にバッハの作品は彼の規範だった。ピアノ曲や室内楽曲の作曲を通じて、無調音楽に確固たるまとまりを与えることを追求していた彼は、1920年、「相互の間にのみ関係づけられる12の音による作曲技法」(十二音技法)を案出するにいたる。

シェーンベルクが、バッハのオルガン曲を管弦楽のために編曲しはじめたのはこの頃だった。コラール前奏曲の《おいでください、創り主、聖霊である神》(BWV667)と《愛す

る魂よ、美しく装え》(BWV654)の編曲が1922年、さらに《前奏曲とフーガ 変ホ長調》の編曲は、1928年5月1日から10月11日にかけて行われている。

当時のシェーンベルクは、1926年からプロイセン芸術アカデミー作曲科教授としてベルリンに住み、同年1月から、十二音技法による最初の大規模な管弦楽曲である《管弦楽のための変奏曲》(作品31、1928年完成)の作曲に取りかかっていた。バッハの対位法的な作品を大規模な管弦楽のために編曲することによって、十二音作品のオーケストレーションの可能性を確かめていたとも考えられよう。シェーンベルクのオーケストレーションは、バッハの原曲の主題や対旋律をさまざまな楽器によって演奏させることにより、複雑な構造を可視化しながら、しかも千変万化な色彩を与えることに成功している。

作曲年代	[原曲] 1739年 [管弦楽編曲版] 1928年5月1日～10月11日
初演	[原曲] 不明 [管弦楽編曲版] 1929年11月10日、フルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団によって
楽器編成	フルート2、ピッコロ2、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン2)、クラリネット2、Esクラリネット2、バス・クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット2、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、グロッケンシュピール、トライアングル、シロフォン、ハープ1、チェレスタ1、弦楽

バッハ

マニフィカト ニ長調 BWV243(クリスマス用挿入曲つき)

天使ガブリエルによって受胎を告知された処女マリアは、不安な心を抱きながら親族エリサベトを訪問した。すると聖霊に満たされたエリサベトはマリアを祝福し、マリアは感動のあまり神を賛美する。《マニフィカト》はルカによる福音書第1章、46–55に記されているこのマリアによる神への讃歌である。カトリック教会では中世以来、晩課の折りに歌われてきたが、バッハの時代のルター派教会ではドイツ語訳で歌われることが多かった。しかしクリスマス、復活祭、聖霊降臨祭の3大祝日には、伝統に従ってラテン語で、しかも管弦楽伴奏による大規模な形式で歌われた。

バッハが《マニフィカト》初期稿(変ホ長調、BWV243a)を作曲したのは、ライプツィヒのトマス・カントルに就任した1723年のことだった。自筆総譜にはクリスマスにふさわしい4曲の挿入曲(A-D)が付加されているため、12月25日、クリスマスの晩課のために作曲したと考えられていた。ところが近年、この初期稿は、まず7月2日の「マリア訪問の祝日」に初演され、12月25日のために4曲の挿入曲が追加されたという説が有力となった。たしかに、4曲の挿入曲は自筆総譜の余白に無理に書かれており、インクもペンも別のものが使われている。ライプツィヒにおける礼拝の詳細についての研究も進み、3大祝日のみならず7月2日の「マリア訪問の祝日」でも、《マニフィカト》は管弦楽伴奏で演奏されたということも明らかとなった。

バッハは1733年、この曲をニ長調に改訂している。初期稿の変ホ長調という調性は、フラット3個で表されるため、3本のトランペットとともに三位一体を象徴することを意図したと考えられるが、そのために必要なEs管トランペットはあまり一般的でなかったため、一般的なD管が使い、弦楽器も開放弦を多用できるニ長調に改訂されたと考えられる。

この年バッハは、ドレスデン宮廷の官職授与を願って《ミサ曲 ロ短調》(BWV232)の〈クリエ〉と〈グロリア〉をザクセン選帝侯兼ポーランド王アウグスト3世に献呈している。2月1日、アウグスト2世(強王)が崩御し、ザクセン選帝国は6か月の国喪となったため、バッハは毎週日曜日の教会カンタータの上演が免除され、そのかわり新たに即位したアウグスト3世との関係を強化するために、カトリックのドレスデンでも上演可能なラテン語の教会作品の充実が急務となった。《ミサ曲 ロ短調》(BWV232)の〈クリエ〉と〈グロリア〉の作曲と同時に、《マニフィカト》後期稿(ニ長調、BWV243)の改訂も、おそらくこの間に行われたのだろう。後期稿(ニ長調)の初演は、服喪義務がゆるめられた1733年7月2日の「マリアの訪問の日」にライブツィヒで行われたとも考えられている。

こんにちではほとんどの場合、このニ長調の改訂稿が演奏されることが多い。しかしクリスマスにふさわしい4曲が挿入された初期稿の魅力もまた格別なものがあり、本日のようにニ長調の改訂稿にこれらの挿入曲を追加して演奏することもある。12月の定期公演にふさわしい選択といえよう。

第1曲は、輝かしい管弦楽の響きに乗って「わたしの魂は主をあがめます」と歌う5声の合唱曲。第2曲〈わが心は喜びに耐えず〉は、ソプラノⅡが「私の霊は救い主である神を喜びたたえます」と歌うアリア。このクリスマス版では、その後に挿入曲A〈高き天より〉が4声で歌われ、ソプラノが歌うコラール定旋律がクリスマスの雰囲気のみごとに演出する。第5曲〈全能であられるおん方よ〉(バス独唱)の後の挿入曲B〈喜んで、声を上げよう〉も4部合唱だが、どちらも通奏低音のみの伴奏により、統一感が計られている。壮麗な第7曲〈みずからおん腕の力を現し〉(合唱)のあとの挿入曲C〈いと高きところには栄光、神にあれ〉は5声合唱だが、オーボエと弦楽器が加わって、神の栄光の賛美にふさわしい。第9曲〈飢えた人々を良いものに飽かせ〉に続く挿入曲D〈エッセイの若枝から〉は、イエスの誕生を12/8拍子の子守歌として表現している。第10曲〈そのしもべ、イスラエルを〉では、2本のオーボエによって吹き鳴らされるグレゴリオ聖歌《マニフィカト》の旋律が印象深い。第12曲〈父と子と聖霊に栄光あれ〉の後半では、「初めにあったように」の言葉通り、第1曲冒頭の音楽が再現され、喜びに満ちて全曲が終わる。

作曲年代	1723年7月2日以前
初演	1723年7月2日
楽器編成	フルート2、オーボエ2(オーボエ・ダモレ2)、トランペット3、ティンパニ1、弦楽、通奏低音(チェロ1、コントラバス1、オルガン1)、独唱(ソプラノⅠ・Ⅱ、アルト、テノール、バス)、合唱

バッハ マニフィカト ニ長調 BWV243 (クリスマス挿入曲つき)

歌詞対訳

訳◎樋口隆一

C

7 & 8. DEC. 2018

I. Magnificat (Coro)

Magnificat anima mea Dominum.

I. わが魂は主をあがめまつり(合唱)

わたしの魂は主をあがめます。

II. Et exsultavit spiritus meus (Soprano II)

Et exsultavit spiritus meus in Deo
salutari meo.

II. わが心は喜びに耐えず(ソプラノII)

私の霊は救い主である神を喜びたたえ
ます。

[Einlagesatz A]

Vom Himmel hoch (Coro)

Vom Himmel hoch, da komm ich her,
Ich bring euch gute neue Mär;
Der guten Mär bring ich so viel,
Davon ich singn und sagen will.
[Martin Luther, 1535]

[挿入歌 A]

高き天より(合唱)

高い天からわたしはやって来る、
あなたがたに新しい知らせを持ってくる、
良い知らせをたくさん、
そのことを歌って知らせよう。
[マルティン・ルター作詞、1535年]

III. Quia respexit humilitatem

(Soprano I)

Quia respexit humilitatem ancillae
suae;
ecce enim ex hoc beatam me dicent

III. それはおん召使の卑しさを(ソプラノI)

身分の低い、この主のはしためにも
目を留めてくださったからです。
今から後、わたしを幸いな者と言うでしょう。

IV. Omnes generationes (Coro)

Omnes generationes.

IV. 見よ今からのち永遠に(合唱)

いつの世の人も。

V. Quia fecit mihi magna (Basso)

Quia fecit mihi magna qui potens est,

V. 全能であられるおん方よ(バス)

力ある方が、わたしに偉大なことをなさい

et sanctum nomen eius.

[Einlagesatz B]

Freut euch und jubiliert (Coro)

Freut euch und jubiliert;
Zu Bethlehem gefunden wird
Das herzeliebe Jesulein,
Das soll euer Freud und Wonne sein.
[Liedtext unbekannter Herkunft]

VI. Et misericordia (Alto, Tenore)

Et misericordia a progenie in progenies
timentibus eum.

VII. Fecit potentiam (Coro)

Fecit potentiam in brachio suo,
dispersit superbos mente cordis sui.

[Einlagesatz C]

Gloria in excelsis Deo (Coro)

Gloria in excelsis Deo!
Et in terra pax hominibus,
bona voluntas!
[Luk. 2: 14]

VIII. Deposuit potentes (Tenore)

Deposuit potentes de sede et exaltavit
humiles.

IX. Esurientes implevit bonis (Alto)

Esurientes implevit bonis et divites
dimisit inanes.

ましたから。

その御名は尊く。

[挿入歌 B]

喜んで、声を上げよう(合唱)

喜んで声を上げよう。
ベツレヘムに
愛らしいイエス様が見つかった。
これこそがあなたがたの
喜びと^{たの}しみです。
[作詞者不詳]

VI. そのあわれみは(アルト、テノール)

その^{あわ}れみは代々に限りなく、
主を^{おそ}畏れる者に及びます。

VII. みずからおん腕の力を現し(合唱)

主はその腕で力を振るい、
思い上がる者を打ち散らしました。

[挿入歌 C]

いと高きところには栄光、神にあれ(合唱)

いと高きところには栄光、神にあれ。
地には平和、御心に適う人にあれ。
[ルカによる福音書2: 14]

VIII. 権力のあるものをその座からおろし (テノール)

権力ある者をその座から引き降ろし、
身分の低い者を高く上げました。

IX. 飢えた人々を良いものに飽かせ(アルト)

飢えた人を良い物で満たし、
富める者を空腹のまま追い返されます。

[Einlagesatz D]

Virga Jesse floruit (Soprano I, Basso)

Virga Jesse floruit,
Emanuel noster apparuit;
Induit carnem hominis,
Fit puer delectabilis;
Alleluja.

[Thomas Popel, 1550]

X. Suscepit Israel (Coro)

Suscepit Israel puerum suum
recordatus misericordiae suae.

XI. Sicut locutus est (Coro)

Sicut locutus est ad Patres nostros,
Abraham et semini eius in saecula.

XII. Gloria Patri (Coro)

Gloria Patri, gloria Filio, gloria et
Spiritus Sancto!
Sicut erat in principio et nunc et
semper et in saecula saeculorum.
Amen.

[Doxologia]

[挿入歌 D]

エッセイの若枝から (ソプラノI、バス)

エッセイの若芽は萌え出で、
われらのエマヌエルが姿を現された。
人として肉体を受けられ、
喜びの御子がお生まれになった。
アレルヤ。

[トマス・ポーペル作詞、1550年]

X. そのしもべ、イスラエルを (合唱)

その僕^{しもべ}イスラエルを受け入れて、
憐れみをお忘れになりません。

XI. われらの先祖に言われたように (合唱)

わたしたちの先祖におっしゃったとおり、
アブラハムとその子孫に対してとこしえに。

XII. 父と子と聖霊に栄光あれ (合唱)

栄光、父にあれ、栄光、子にあれ、栄光、
聖霊にあれ。
初めにあったように、今も、そして常に、
代々限りなく。アーメン。

[小栄唱]

I～XIはルカによる福音書1: 46～55による

XII、挿入歌A～Dの出典についてはそれぞれの歌詞の末尾に記した

ルカによる福音書の章句の訳は『聖書』(新共同訳、日本聖書協会、1996年)に準拠した

バルタザール・ノイマン合唱団

合唱指揮

デトレフ・ブラチュケ

ソプラノ

・ アニャ・ビットナー
・ アンネメイ・ブレッシング・
レイハウゼン
・ ハイケ・ハイルマン

・ マーガレット・ハンター
・ カーリン・ギレンハンマー
・ アグネス・コバッチ
・ マニヤ・シュテファン
・ 岡村ちゆき

・ カティア・ブラシュカ
・ ジビレ・シャイブレ
・ クリスティーネ・ズースムート

・ ドロテー・ヴォールゲムート

アルト

・ バーバラ・コゼリ
・ ビート・ダデック・ラドンス
・ ベトラ・エーリスマン
・ フィリップ・ミネッチャ
・ アンネ・グライリング
・ マティアス・ルフ

テノール

・ ニルス・ギーベルハウゼン
・ ベルント・ランバウアー
・ ミルコ・ルートヴィヒ
・ ヤン・ベトリカ
・ クリスティアン・ラートゲ
パー
・ ヴィクトール・シアリング

バス

・ ティロ・ダールマン
・ シュテファン・ガイヤー
・ フリーデマン・クロース
・ ラインハルト・マイヤー
・ ミヒャエル・バンネス
・ ウルフリート・シュターバー
・ アンドレアス・ヴェルナー

第二十二回

バレエなくして

管弦楽曲の発展はない

シリーズ

オーケストラの ゆくえ

現代のオーケストラをめぐる

さまざまなトピックを深掘りしていくシリーズ。

第二十一回は、音楽ジャーナリスト・評論家の林田直樹さんに、

近代のオーケストラを語る上で欠かせない

バレエとの関わりについて語っていただきます。

林田直樹

Naoki Hayashida

ストラヴィンスキーの革命を生んだ ロシア・バレエ団との共同作業

舞踊は、昔も今も、オーケストラ音楽のレパートリーが生み出される直接のきっかけとなるだけでなく、作曲家に靈感を与え、「オーケストラ音楽」というジャンルそのものを衝き動かす推進力となってきた。

それは、J.S. バッハ以前の、たとえばフランス・バロックの時代からそうであった。ブルボン朝の宮廷文化を象徴するリュリやラモーのオペラ・バレエから生まれた舞踊組曲は、いわゆるバロック・ダンスの副産物である。それはバッハの管弦楽組曲へと連なる元祖というべきもののだが、やがて、交響曲の中に必ずといっていいほど含まれる舞踊的楽章へとつながっていく。

19世紀にヨハン・シュトラウス・ファミリーが興隆させたワルツやポルカは、舞踏会に不可欠の実用音楽として大きな人気を集めたが、その本質的性格は「1曲だけでは足りない」というところにある。舞踏音楽とは「もっと、もっと！」と飽くなき欲求を刺激するものなのである。その熱狂も、オーケストラ音楽を輝かせるひとつの要素なのだ。

20世紀は舞踊の世紀といわれることがある。クラシック音楽の発展において、20世紀ほどバレエが大きな役割を果たした時代もないからだ。その象徴が1913年にパリのシャンゼリゼ劇場で初演されたストラヴィンスキー《春の祭典》であるが、あの革命的な音楽の根源はバレエであった。

ところが、音楽ファンの多くは、《春の祭典》を純粋な管弦楽曲として鑑賞することはあっても、バレエ芸術として視覚・聴覚合わせて親しんでいる人は案外少数派なのではないだろうか。

セルゲイ・ディアギレフという興行師がいて、ヴァーツラフ・ニジンスキーという舞踊家・振付家がいいて、ニコライ・レーリヒという舞台美術家がいいて、ロシア・バレエ団のダンサーたちがいて——彼らとの共同作業のなかでこそ、ストラヴィンスキーの音楽が生まれたことを忘れてはならない。

オーケストラ音楽を大きく前に進めたのは、バレエだったという典型的な例である。

バレエに創意を注ぎ込んだ チャイコフスキー

バレエ音楽の皇帝とも呼ぶべき存在はチャイコフスキーである。

チャイコフスキーの出現まで、バレエ音楽作曲家は二流の地位に甘んじていた。多くの作曲家はオペラで成功することを夢見ることはあっても、バレエに手を染めることは格下の仕事とみなしていた。実際には、19世紀前半にアダムが《ジゼル》の音楽で果たした精巧なドラマの仕組みは、同時代のドニゼッティやベッリーニのオペラに匹敵する高度なものだったし、その後もすぐれたバレエ音楽はたくさん生まれてきているが、バレエ音楽はあくまでダンサーを輝かせるためのもので、主張しすぎず控えめであるのが良しとされてきた。

ところがチャイコフスキーにはそのような考えはまったくなかった。《白鳥の湖》では本来オペラのために書いた楽想を惜しげもなく投入し、ワーグナーに匹敵するような雄弁でドラマチックな音楽を書き上げた。《眠りの森の美

女》では、《交響曲第5番》の拡大形ともいえるような途方もない規模の音楽を、バロック・ダンスを意識しつつエレガントにまとめあげた。そして最晩年の《くるみ割り人形》では、子供のためのおとぎ話という装いのもと、真の大人のための洗練された幻想世界を作り上げた。

ただ、バレエ音楽と交響曲との間には大きな違いがある。交響曲作家は、筆のおもむくままに、自分自身の王国を築き上げればよいが、バレエ音楽作曲家はそうはいかない。現場の要請に応えなければならないのである。振付家から、「このシーンではダンサーがこう回って、こう動くことにしたいから、もう1小節



マリヤ・ピルツによる〈いけにえの踊り〉を描いたヴァランタン・グロス・ユゴのドローイング(1913年6月、『Montjoie!』誌に掲載)。ピルツはニジンスキーの妹プロコシラヴァ・ニジンスカの代役として、《春の祭典》の主役であるいけにえの乙女に急遽抜擢された。



新国立劇場バレエ団
《不思議の国のアリス》より、
アリス(米沢唯)、
ハートのジャック(渡邊峻郁)。
2018年11月2日、
新国立劇場(撮影:鹿摩隆司)

付け加えてほしい」、「ここは余興の踊りのシーンだから生きのいい民族舞曲をもうひとつ入れてくれ」といった細かい要求が次々に飛んでくるのだ。

バレエの現場では、作曲家がいちばん偉いわけではない。指揮者にいたっては、ときにダンサーのわがままに付き従う執事のようにでなければならない。現代でも、チャイコフスキーの三大バレエのような名作の上演でさえ、曲の入れ替えやカットは当たり前におこなわれている。音楽はここでは絶対不可侵のものではないのだ。

チャイコフスキー自身がそういうことをよく理解する人だった。特に《眠りの森の美女》では、偉大な振付家マリウス・プティパからの要求に柔軟に応じ、ときには変更を受け入れつつ作曲を進めていったのである。

音楽が、音楽以外の外的要素によって揺り動かされ、変化を余儀なくされるとき、それが面白い方向に働くときがある。テレビや映画の音楽を考えてみればわかる。このシーンの演技を生かすために、ときには何秒のなかでこう

いう音楽がほしい、という厳しい制約のなかで曲が提供されるからこそ、逆にいいものができることもある。

今こそ現代の振付師と作曲家によるオリジナルのバレエを！

いまバレエの世界を席卷している最新の話題についても、触れておこう。

それは《不思議の国のアリス》という、2011年に英国ロイヤル・バレエで初演され、世界中のさまざまなバレエ団で競って再演され、この11月には新国立劇場でも上演されているバレエのことだ。

19世紀の英国が生み出したルイス・キャロル原作の子供向けのおとぎ話を題材に、ユーモラスで魔術的で、現代アートのエッセンスを盛り込んだ、このシュールで可愛らしいバレエの大成功には、振付家クリストファー・ウィールドンと作曲家ジョビー・タルボット、そして舞台美術・衣裳のボブ・クロウリーの共同作業が不

可欠であった。

この作品は映画にもなっており、DVDも発売され、動画サイトでも一部を観ることができるので、ぜひご覧いただきたいのだが、とにかくタルボットの音楽がファンタスティックで優れているのである。多様なパーカッションの音色を生かした大編成のオーケストラは、プロコフィエフの《シンデレラ》や《ロメオとジュリエット》のひんやりとした機械的な幻想、色彩感豊かな厚みのある響きを継承しつつ、英国風のウィットを加えた親しみやすいものだ。

特筆されるのが、このバレエ作品のなかに、チャイコフスキーの《眠りの森の美女》のローズ・アダージオ¹をパロディ化するシーンを入れていること。あくまでベースはクラシックであり、その上に積み上げられた作品であることが、ここに象徴されている。

日本の音楽界でも異分野同士のコラボレーションは数多くおこなわれているが、いま最も必要とされているのは、英国ロイヤル・バレエが《不思議の国のアリス》で成功させたように、現代の振付家と作曲家が一緒になって、新しいバレエを作るために、あくまでオリジナルの音楽を作りながら、舞台を制作することである。それがチャイコフスキーやストラヴィンスキーやプロコフィエフのバレエ音楽を生み出すための母胎となる仕事の仕方だったのだから。

コンサートホールでこそ味わえる 作曲家の仕事

最後に、バレエ音楽を舞台の要素なしに聴く意味について。

劇場では本来、バレエでもオペラでも、オーケストラは常にピットの中に押し込められている。響きは湯気のように垂直に立ち上り、天井

から跳ね返って客席にシャワーのように降り注いでくる。そうした響きには独特の魅力が確かにある。だがそこでは、オーケストラはあくまで踊り手や歌手を支える縁の下の力持ちの役割に甘んじなければいけない。総合芸術のなかの一部分なのである。

コンサートホールではそうした制約からオーケストラも指揮者も解放される。あくまで音楽そのものが主人公となって、舞台に遠慮することなく、自由に振る舞うことができる。ピットの中にいたときには聴こえなかったような隠れた音も、誇らしげに姿を現す。作曲家の仕事を細部まで味わいぬくことができる。N響では先月と今月の定期で2つのバレエ音楽をプログラムに掲げている。プロコフィエフ《ロメオとジュリエット》を指揮したノセダはかつてマリインスキー劇場との縁が深く、今月チャイコフスキー《くるみ割り人形》を指揮するフェドセーエフはサンクトペテルブルクの出身。バレエの伝統を身近に感じてきた2人の指揮者が、コンサートでの演奏において、どんな解釈を示すかも楽しみである。

註

1. 《眠りの森の美女》第1幕で、オーロラ姫が4人の王子から求婚のバラを受ける場面。

文 | 林田直樹 (はやしだ なおき)

音楽ジャーナリスト・評論家。1963年生まれ。慶應義塾大学文学部仏文学専攻を卒業後、音楽之友社で楽譜、書籍、『音楽の友』、『レコード芸術』の編集を経て2000年に独立。クラシック音楽を中心にオペラ、バレエから古楽、現代音楽まで、ジャンルにこだわらない横断的な著述活動を行う。

Overview

2019年1月定期公演

ソヒエフが振るA・Bプログラムでは N響弦楽器奏者のソロに注目

1月定期公演のAプロを指揮するのはトゥガン・ソヒエフ。現在、トゥールーズ・キャピトル劇場管弦楽団の音楽監督とボリショイ劇場の首席指揮者兼音楽監督を務め、N響との共演歴も豊富だ。グリエールの《ハープ協奏曲》で独奏を務めるのは名手グザヴィエ・ドゥ・メストレ。優美かつ華麗な独奏を披露してくれることだろう。ベル

リオーズの《交響曲「イタリアのハロルド」》はバイロンの長編詩に触発されて書かれた作品。交響曲と題されるものの、ヴィオラ独奏を要する作品で、N響首席奏者の佐々木亮がソロを務める。

同じくソヒエフが指揮するBプロでは、リムスキー・コルサコフの《交響組曲「シェエラザード」》が聴きもの。『千一夜物語』を題材とした壮麗な音絵巻がくりひろげられる。シェエラザード姫の役を担うのは第1コンサートマスター、篠崎史紀のソロ。今回のソヒエフのプログラムではA、BプロともにN響メンバーのソロが活躍する。

Cプロはステファヌ・ドゥネーヴが2015年に続いて再登場。カラフルなオーケストレーションに彩られた作品が並ぶ。フランスのスター奏者、ゴージェ・カブソンはサン・サーンスの《チェロ協奏曲第1番》でソロを担う。レスピーギの《交響詩「ローマの松」》では、輝かしくパワフルなブラス・セクションが壮大なクライマックスを築く。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

A

1/26(土) 6:00pm

1/27(日) 3:00pm

NHKホール

リャードフ／交響詩「バーバヤガー」作品56

グリエール／ハープ協奏曲 変ホ長調 作品74

ベルリオーズ／交響曲「イタリアのハロルド」作品16*

指揮：トゥガン・ソヒエフ

ハープ：グザヴィエ・ドゥ・メストレ

ヴィオラ：佐々木 亮*

B

1/16(水) 7:00pm

1/17(木) 7:00pm

サントリーホール

フォーレ／組曲「ベレアスとメリザンド」作品80

ブリテン／シンブル・シンフォニー 作品4

リムスキー・コルサコフ／交響組曲「シェエラザード」作品35

指揮：トゥガン・ソヒエフ

C

1/11(金) 7:00pm

1/12(土) 3:00pm

NHKホール

ルーセル／バレエ組曲「バカスとアリアーヌ」第2番

サン・サーンス／チェロ協奏曲 第1番 イ短調 作品33

ベルリオーズ／序曲「ローマの謝肉祭」作品9

レスピーギ／交響詩「ローマの松」

指揮：ステファヌ・ドゥネーヴ

チェロ：ゴージェ・カブソン

PROGRAM

A

Concert No.1900 **NHK Hall**

December

1(Sat) 6:00pm

2(Sun) 3:00pm

conductor | **Alexander Vedernikov**

piano | **Andrei Korobeinikov**

concertmaster | **Ryotaro Ito**

Georgy Sviridov

**“Snow Storm”, musical illustrations
after Pushkin [28’]**

- I Troika
- II Waltz
- III Spring and Autumn
- IV Romance
- V Pastorale
- VI Military March
- VII Wedding Ceremony
- VIII Echoes of Waltz
- IX Winter Road

Aleksandr Scriabin

**Piano Concerto f-sharp minor op.20
[29’]**

- I Allegro
- II Andante
- III Allegro moderato

— intermission —

Aleksandr Glazunov

**Symphony No.7 F major op.77
“Pastoral” [35’]**

- I Allegro moderato
- II Andante
- III Scherzo: Allegro giocoso
- IV Finale: Allegro maestoso

Artist Profiles

Alexander Vedernikov, conductor



Alexander Vedernikov was born in Moscow in 1964, and after graduating from the Moscow Conservatory, he became an assistant conductor to Vladimir Fedoseyev of the Moscow Radio Symphony Orchestra (presently known as the Tchaikovsky Symphony Orchestra of Moscow Radio) in 1988 and later became Second Conductor to the orchestra. He assumed the position of Artistic Director and Chief Conductor of

1 & 2. DEC. 2018

A

the Russian Philharmonia Symphony Orchestra from its founding in 1995 until 2004. From 2001 to 2009, as Music Director and Chief Conductor of the Bolshoi Theatre, he rigorously introduced numerous works by mainly Russian composers in an effort to improve the quality of its performances. In its Japan tour in June 2009, he conducted Tchaikovsky *Eugene Onegin*. In 2009, he became Chief Conductor of the Odense Symphony Orchestra of Denmark and Honorary Conductor from June 2018, and he assumed the position of Chief Conductor of the Royal Danish Opera from September 2018. He has frequently been invited to guest-conduct by world-leading orchestras and opera houses. In Japan, he conducted Tokyo Nikikai's *Macbeth* by Verdi, and also guest-conducted the Pacific Music Festival in Sapporo. This is his fifth collaboration with the NHK Symphony Orchestra following his guest appearances in 2009, 2011, 2014 and 2016.

Andrei Korobeinikov, piano



Andrei Korobeinikov is an artist full of intellectual curiosity and interest in people. While continually learning languages including Russian, English, Italian and Esperanto, he has also had a keen interest in literature and law, the latter which he started to learn from his early teens. As a pianist, he has a vast repertoire, ranging from Purcell to contemporary works, but the core of his repertoire comprises German

and Russian music. He was born in Dolgoprudny in the suburbs of Moscow in 1986. He started to learn piano at the age of five, and had his first public recital at the age of eight. After graduating from the Moscow Conservatory, he further studied at the Royal College of Music, London. He has won numerous prizes in competitions including the 1st prize of the Scriabin International Piano Competition in 2004, and the 2nd prize of the Rachmaninoff International Piano Competition in Los Angeles a year later. He has also been ardently engaged in chamber music concerts, working with cellists Alexander Kniazev and Johannes Moser, as well as violinists Vadim Repin and Dmitri Makhtin, and the Borodin Quartet. He will return to work with the NHK Symphony Orchestra for the first time in over seven years to present a much anticipated performance of his favorite Scriabin under the baton of his friend and renowned conductor Alexander Vedernikov.

[Alexander Vedernikov by Daisuke Hirose, music critic, Andrei Korobeinikov by Takaakira Aosawa, music critic]

Program Notes | Akira Ishii

Georgy Sviridov (1915–1998)

“Snow Storm”, musical illustrations after Pushkin

Born in 1915, Georgy Sviridov lived through the era of the Soviet Union. His birthplace was a small town in Kursk, the southwestern region of Russia. He moved to Leningrad and

took lessons with Mikhail Yudin at the Central Music College until 1936. Sviridov then attended the Leningrad Conservatory to study with Dmitry Shostakovich. Sviridov graduated from there in 1941.

In Leningrad Sviridov composed a number of instrumental pieces, but it was not until the time he moved to Moscow in 1955 that he won a reputation as a composer from the Soviet authorities. Sviridov then wrote several oratorios and other compositions that were strongly associated with the Soviet government, resulting in a Lenin Prize in 1960. He was a People's Artist of the RSFSR in 1963 and of the USSR in 1970 and a Hero of Soviet Labor in 1975. He eventually acquired the position of First Secretary of the RSFSR Union of Composers. How deeply the composer was involved with politics is unclear. An obituary of Sviridov published on January 15, 1998 by *The Independent*, a British newspaper, sums up Sviridov's activities as follows: "... it is easy for us, comfortable in the relative freedoms of democracy, to forget that it was sometimes necessary to sup with the devil to be able to sup at all."

Aleksandr Pushkin's *Snow Storm* was completed in 1830. It is the second of the five short stories that form *The Tales of the Late Ivan Petrovich Belkin*. The story is about a seventeen-year-old woman with aristocratic background falling in love with a young military officer. Her parents disapprove of their relationship, and the young woman leaves her family to marry the young officer on a winter's night during a heavy snow storm. An eighty-minute film version of Pushkin's tale was released in 1965 with music by Sviridov. The composer then created the concert version of the music in 1974, gathering nine relatively short pieces to form a suite. The whole suite is filled with melodies full of Russian character. Perhaps this is most apparent in the second piece, *Waltz*. The main theme here sounds undoubtedly Russian.

Aleksandr Scriabin (1872–1915)

Piano Concerto f-sharp minor op.20

Aleksandr Scriabin was born in Moscow in 1872. Scriabin studied piano and composition at the Moscow Conservatory. While studying there, he was already highly regarded as a pianist; at the same time, his compositional skills reached at a high level, writing several piano pieces. His early works include Piano Sonata No. 1 in F minor. In 1892 he graduated from the Conservatory with honors in piano performance. Scriabin then became active as a pianist and traveled numerous places in Europe. In 1898 he obtained a teaching position at the Moscow Conservatory. In these early years of Scriabin's professional life, he was also busy composing music; his only piano concerto — Piano Concerto in F-sharp minor, Op. 20 — indeed belongs to this time period.

Scriabin was first influenced by Frédéric Chopin, writing piano pieces using a tonal language. Later in his career, however, Scriabin developed strong interest in atonal music and began exploring a new musical system. He was, for instance, attracted to synesthesia, which led him to unite colors with harmonic tones in his atonal scale. In the end, Scriabin became one of the most innovative but controversial of the early modern composers. His piano concerto, however, contains no element of "strangeness" associated with Scriabin's radical modern ideas.

Piano Concerto in F-sharp minor, Op. 20 was completed in 1897. The first performance of the work took place on October 23, 1897. The composition comprises three movements: Allegro, Andante, and Allegro moderato. In the first movement, the piano solo enters after a short introduction played by the orchestra. The movement is full of melancholic melodies. The second movement is written in the form of theme and variations. The tempo between the

variations fluctuates widely to make the music more varied. The finale uses thematic materials from the opening movement. The key changes from F-sharp minor to F-sharp major near the end, creating brilliant sonority that leads to the magnificent conclusion of the whole piece.

Aleksandr Glazunov (1865–1936)

Symphony No.7 F major op.77 “Pastoral”

Aleksandr Glazunov, one of the most influential figures of the Russian composers of the Romantic Era, was born in 1865. He was a child prodigy on piano but also exhibited his talent for composing at an early age. Glazunov was introduced to Nikolai Rimsky-Korsakov when he was only fifteen years old. Rimsky-Korsakov, the leading composer of the time, looked at a score of an orchestral piece by the young composer and was astonished by the quality of Glazunov's talent. In 1899 Glazunov became a professor at the St. Petersburg Conservatory and assumed the position of the directorship there in 1905. Besides composing Glazunov was also active as a conductor. Later in his life, Glazunov kept a distance from his native land and lived in France, where he died in 1936.

The list of Glazunov's works is not by any means short. He composed three ballets, eight symphonies not counting an unfinished one, and numerous orchestra pieces such as overtures and waltzes. The composer also wrote a high number of chamber music pieces including those for piano solo.

Glazunov's Symphony No. 7 in F major, Op. 77 “Pastoral” was composed between 1901 and 1902. The first performance took place on January 3, 1903, conducted by the composer himself. The work was dedicated to Mitrofan Belyayev, a wealthy business person who supported many Russian composers including Glazunov and Rimsky-Korsakov. The symphony is scored for three flutes (the third doubling piccolo), two oboes, two clarinets, two bassoons, four French horns, two trumpets, three trombones, tuba, timpani, triangle, cymbal, bass drum, harp, and five-part strings.

The first movement, *Allegro moderato*, opens with a series of solo passages played by woodwind instruments. The motives here seem to mimic bird calls. At the middle of the movement a succession of short phrases consisting of fast moving notes appears, accumulating tension as if a storm is about to come. The slow second movement (*Andante*) in D minor begins with a chorus of brass instruments. Here two trombones and a tuba are added to the brass section of the previous movement to enhance the sense of solemnity. The initial phrase in the opening measures remains mostly audible throughout the movement. The third movement is a scherzo marked *Allegro giocoso*. Unlike typical scherzos of the early nineteenth century, it is written in duple meter. In this movement a triangle is introduced. This percussion instrument sometimes accompanies a group of woodwind instruments playing tender melodies. The finale, *Allegro maestoso*, begins with a folk-like melody in unison. This theme is developed throughout the movement with brass instruments often restating the theme profoundly. In the middle section, the key changes to A major, which invites gentler sonority in the peaceful part of the finale. Towards the end, the tempo picks up to prepare for the grand ending. After a series of concluding chords, the folk-like tune at the beginning of the finale comes back to end the piece.

Akira Ishii

Professor at Keio University. Visiting Scholar at the Free University Berlin between 2007 and 2009. Holds a Ph.D. in Musicology from Duke University (USA).

PROGRAM

B

Concert No.1902 **Suntory Hall**

December

12(Wed) 7:00pm

13(Thu) 7:00pm

conductor | **Vladimir Fedoseyev**

children's chorus | **NHK Tokyo Children Chorus***

(Isamu Maya, chorus master)

concertmaster | **Fuminori Maro Shinozaki**

Peter Ilich Tchaikovsky
"The Nutcracker", ballet op.71 [90']

Overture

Act I

Tableau I

- I The Christmas Tree
- II March
- III Little Galop and Entrance of New Guests
- IV Danse Scene (Drosselmeyer's Gifts)
- V Scene and Dance Gross-Vater
- VI Scene (Clara and the Nutcracker)
- VII Scene (The Nutcracker and the Mouse-King)

Tableau II

- VIII Scene (In the Pine Forest)
- IX Waltz of the Snow-Flakes*

— intermission —

Act II

Tableau III

- X Scene (In the Magic Castle on the Sugar Mountain)
- XI Scene (Clara and the Prince)
- XII Divertissement
 - a. Chocolate (Spanish Dance)
 - b. Coffee (Arabian Dance)
 - c. Tea (Chinese Dance)
 - d. Trepak (Russian Dance)
 - e. Dance of the Reed-Pipes
 - f. Mother Gigogne and the Clowns

XIII Waltz of the Flowers

- XIV Pas de deux (Intrada—Variation 1 Tarantelle—
Variation 2 Dance of the Sugar-Plum Fairy—
Coda)

XV Waltz Finale and Apotheosis

B

12 & 13 DEC. 2018

Vladimir Fedoseyev, conductor



Vladimir Fedoseyev was born in Leningrad (present day St. Petersburg) in 1932, and studied at the Gnessin State Musical College, as well as the Moscow Conservatory, where he studied under Leo Ginzburg. In 1974, he became Artistic Director and Chief Conductor of the Moscow Radio Symphony Orchestra (now the Tchaikovsky Symphony Orchestra), succeeding Gennady Rozhdestvensky. Since then, he has been

leading the orchestra for more than 40 years. He was also Chief Conductor of the Wiener Symphoniker from 1997 to 2004. Until today, he has made guest appearances with many orchestras and opera houses including the Berliner Philharmoniker, the Gewandhausorchester Leipzig, the Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, the Cleveland Orchestra, the Bolshoi Theatre, the Mariinsky Theatre, the Wiener Staatsoper, La Scala, Milan, the Teatro dell'Opera di Roma and the Oper Zürich.

His first appearance with the NHK Symphony Orchestra was in the May subscription concert in 2013, when he conducted Shostakovich Symphony No.1 and others. After that, he guest conducted the orchestra in April and November 2015, and February and May 2017, presenting programs of Russian music. He led the orchestra in its Kyushu and Okinawa tour in July 2018.

NHK Tokyo Children Chorus, children's chorus

NHK Tokyo Children Chorus (formerly known as Tokyo Broadcasting Children's Chorus Group), was formed in March 1952 for the purpose of consolidating educational programs as well as programs for children on NHK for the healthy growth of the mind and spirit of children. In addition to appearing on NHK TV and radio, it has frequently worked with major Japanese orchestras and engaged in international exchanges with chorus groups from other countries. It has also commissioned choir works to Japanese composers, and introduces many of them in Japan and overseas. The chorus has won numerous awards both at home and abroad, including 1st prize in the children's category of the Centennial of Zoltán Kodály's Birth Competition and the grand prix in the same competition.

In 2009, the chorus took part in a concert along with the NHK Symphony Orchestra to celebrate the 50th anniversary of the marriage of the Emperor and Empress and the 20th anniversary of the Emperor's enthronement. It often performs operatic works staged at the New National Theater in Tokyo. The chorus marked the 60th anniversary of its establishment in 2012. Since 2010, it has often worked with the NHK Symphony Orchestra, and in October 2018, it sang Orff's *Carmina Burana* with the orchestra under the baton of Paavo Järvi at the NHK Music Festival.

[Vladimir Fedoseyev by Haruo Yamada, music critic, NHK Tokyo Children Chorus by Junko Shibatsuji, music critic]

Peter Ilich Tchaikovsky (1840–1893)

“The Nutcracker”, ballet op.71

Each year in December most professional orchestras in Japan occupy themselves with an extremely hectic schedule performing Beethoven's Ninth Symphony. People love to listen to the monumental symphony with chorus and vocal soloists at concerts. This is rather an unusual phenomenon, not to be observed anywhere else in the world. Perhaps people in other parts of the globe do not appreciate Beethoven's Ninth as much during the winter holiday season, but they tend to have their own musical tradition that is strongly associated with Christmas. In the United States of America, for instance, many institutions, professionals and amateurs alike, offer performances of Handel's *Messiah*. This seems to be a peculiar practice, since the work was originally intended for Easter, not for Christmas. In Germany, the opera *Hansel and Gretel* by Engelbert Humperdinck is frequently put on the stage in December. However, the most popular theatrical work during the Christmas season is by far *The Nutcracker* by Tchaikovsky. The ballet is performed countless times in numerous places in Europe, the United States, and Asia. Needless to say, Japan is included here.

The Nutcracker, Op. 71 is a ballet in two acts, based on Alexandre Dumas' *The Story of a Nutcracker*, which itself is an adoption of E. T. A. Hoffmann's story *The Nutcracker and the Mouse King*, written in 1816. The work premiered in St. Petersburg on December 18, 1892. The first performance of it was not a successful event, partly because it was not well choreographed. Moreover, the plot was criticized, for it was not faithful enough to E. T. A. Hoffmann's original. The ballet, however, eventually gained popularity and is regarded today as one of the three best ballets Tchaikovsky composed (the other two are *Swan Lake* of 1876 and *Sleeping Beauty* of 1889).

The story of *The Nutcracker* takes place on Christmas Eve. A girl named Clara is at a Christmas party hosted by her family. Clara's godfather Drosselmeyer gives her a Christmas present, a doll-shaped nutcracker made of wood. After everyone goes to sleep, Clara comes downstairs to check on her new toy. The clock strikes midnight and suddenly all the toys come to life. Clara ends up in the middle of a battle between toy soldiers led by her Nutcracker and fierce mice. She helps the Nutcracker, and the mice are defeated. Suddenly, the spell is broken, and the Nutcracker is transformed into a young man. He is Hans-Peter, a nephew of Drosselmeyer's. Three of them then go to the Kingdom of Sweets. When Clara wakes on Christmas morning, she wonders if everything was a dream.

The ballet opens with a brief overture, which sounds rather simple and innocent, anticipating the story centered around a little child. The first several pieces after the overture depict a gorgeous party. The scene ends with slow and tranquil music illustrating the guests' departure as well as Clara's going to bed. This is followed by boisterously sounding music for the battle scene. In the second act a series of relatively short dances appears. Most here are popular; they include *Tea (Chinese Dance)* and *Trepak (Russian Dance)*. The ballet concludes with a set of glorious pieces for the two principal dancers, followed by a grand finale.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.58

PROGRAM

C

Concert No.1901 **NHK Hall****December****7(Fri) 7:00pm****8(Sat) 3:00pm**conductor | **Thomas Hengelbrock**chorus | **Balthasar Neumann Choir (Detlef Bratschke, choir director)**soloists | **Members of the Balthasar Neumann Choir**Agnes Kovacs[□] (soprano I), Barbara Kozelj[■] (soprano II),Filippo Mineccia[◇] (alto), Mirko Ludwig[◆] (tenor),Jan Petryka[○] (tenor), Reinhard Mayr[●] (bass),Thilo Dahlmann[△] (bass)concertmaster | **Fuminori Maro Shinozaki****Johann Sebastian Bach****Suite No.4 D major BWV1069 [20']**

I Overture

II Bourrée I – II

III Gavotte

IV Menuet I – II

V Réjouissance

Johann Sebastian Bach /**Arnold Schönberg****Prelude and Fugue E-flat major
BWV552 “St. Anne” [16']**

— intermission —

Johann Sebastian Bach**Magnificat D major BWV243****(with 4 Christmas Interpolations) [35']**

I Magnificat

II Et exsultavit spiritus meus[■]

[Interpolation A] Vom Himmel hoch

III Quia respexit humilitatem[□]

IV Omnes generationes

V Quia fecit mihi magna[●]

[Interpolation B] Freut euch und jubiliert

VI Et misericordia^{◆◇}

VII Fecit potentiam

[Interpolation C] Gloria in excelsis Deo

VIII Deposuit potentes[○]IX Esurientes implevit bonis[◇][Interpolation D] Virga Jesse floruit^{□△}

X Suscepit Israel

XI Sicut locutus est

XII Gloria Patri

Thomas Hengelbrock, conductor



Thomas Hengelbrock was born in Wilhelmshaven, Germany in 1958. He began his career as a professional violinist, working as an assistant to composers including Lutosławski, Kagel and Doráti. In 1985, he co-founded the Freiburger Barockorchester. He also founded the Balthasar Neumann Choir in 1991 and the Balthasar Neumann Ensemble in 1995. From 1995 to 1998, he

served as Artistic Director of the Deutsche Kammerphilharmonie Bremen. He was Music Director of the Volksoper Wien from 2000 to 2003, and Principal Conductor of the NDR Elbphilharmonie Orchester (formerly the NDR Sinfonieorchester Hamburg) from 2011 to the summer of 2018. He is currently chef associé of the Orchestre de Paris. In addition to conducting concerts, he is active in the operatic field, and is devoted to introducing lesser known works to the public.

His technique of creating music vividly by incorporating various ideas when conducting modern orchestras, rather than adhering to historically informed performances (HIP) in principle, has been evaluated highly. This is his first collaboration with the NHK Symphony Orchestra.

Balthasar Neumann Choir, chorus

The Balthasar Neumann Choir was founded in 1991 by conductor Thomas Hengelbrock, who gathered the best possible vocalists from Germany and other European countries. The name is derived from Johann Balthasar Neumann, a German baroque era architect known for his integrated designs of not only buildings but also sculptures and gardens. Together with the Balthasar Neumann Ensemble of period instruments, founded in 1995 by Thomas Hengelbrock, the choir sings by applying the historically informed performance approach and incorporating its musicological studies under his leadership. Their vocal repertoire ranges from Monteverdi to Bach.

The choir has expanded its repertoire further to include works from the Romantic period and contemporary works, and enjoys a reputation as Europe's leading choir. In addition to Hengelbrock, the choir has been regularly conducted by Pablo Heras-Casado and Ivor Bolton in recent years, and has widened its activities including its appearances in European music festivals. In 2014, it appeared in the Lucerne Festival at Easter, performing Beethoven *Missa solemnis* under András Schiff. This is the choir's long-awaited debut in Japan, and it will be working with the NHK Symphony Orchestra for the first time.

[Thomas Hengelbrock by Nobuyasu Matsuoka, music critic, Balthasar Neumann Choir by Junko Shibatsuji, music critic]

Johann Sebastian Bach (1685–1750)

Suite No.4 D major BWV1069

Johann Sebastian Bach composed at least four Suites for Orchestra. The term suite should be familiar to today's concertgoers of symphony orchestras. It frequently appears in programs of such musical establishments and usually indicates those orchestral compositions that have a number of loosely connected movements. Perhaps one of the best known such pieces is *The Planets* composed by Gustav Holst.

The baroque suite, however, is quite different from its modern counterpart. Suite in the seventeenth and eighteenth centuries meant a type of composition consisting mostly of dance movements, all written in the same key. It was developed first in France during the reign of Louis XIV, who loved ballet.

In the first half of the eighteenth century in Germany, suites for orchestra became extremely popular. German composers placed emphasis on the opening movement of such compositions. They always began the piece with a French overture, which comprises a majestic introduction with sharp rhythms followed by a fugal section. As a result, orchestral suites were not usually called “suites” but “overtures.” Bach's orchestral suites are no exception. Nearly all of the eighteenth-century sources for them indeed show “overture” as their title.

Not just making the opening movement substantially large, Bach also incorporated into his overtures Italian elements of solo concertos and concerto grossos by writing many solo passages for numerous combinations of instruments. In the case of Suite No. 4, a group of wind instruments — three oboes and a bassoon — and strings play a concertino role. Incidentally, solo voices were added to the concerto-like parts of the overture when Bach adopted the movement to compose Cantata *Unser Mund sei voll Lachens*, BWV 110.

Johann Sebastian Bach (1685–1750) / Arnold Schönberg (1874–1951)

Prelude and Fugue E-flat major BWV552 “St. Anne”

Since the late eighteenth century serious musicians have always been attracted to Bach's music. The public concert of *St. Matthew Passion*, BWV 244 conducted by Felix Mendelssohn in 1829 is one of the well-known examples of composers' having a keen interest in Bach's music. Some just studied it, but others reworked it to fit the musical taste of the time. For *St. Matthew Passion* Mendelssohn, for instance, replaced old-fashioned musical instruments with more modern ones.

In the early twentieth century, there was a revival of baroque music. Needless to say, Bach's music played a central role, but works by other baroque composers also attracted a great deal of attention. Major opera houses in Germany, for instance, put Handel's operas on the stage. Under these circumstances numerous musicians created orchestra versions of Bach's compositions, especially his organ pieces. They include Passacaglia and Fugue in C minor, BWV 582; Prelude and Fugue in D major, BWV 532 (both arranged by Ottorino Respighi); and Fantasia and Fugue in C minor, BWV 537 (arranged by Edward Elgar). Perhaps the best known of such re-worked compositions is Toccata and Fugue in D minor, BWV 565 (though highly unlikely that it is a composition by Bach) orchestrated in the 1920's by Leopold Stokowski.

Arnold Schönberg, one of the legendary composers who exploited atonal music, also had

strong interests in Bach's music. He even used a theme consisting of Bach's name (B-flat, A, C, and B-natural) in one of his non-tonal compositions (Variations for Orchestra, Op. 31). Like others, Schönberg too re-worked Bach's organ pieces; Prelude and Fugue in E-flat major, BWV 552 "St. Anne" is one of them. The organ piece is a part of *Dritter Theil der Clavier-Übung* (*Clavier-Übung III*), published in 1739. The prelude appears at the beginning of the publication, while the fugue, at the end of the book; however, these two sections are today usually performed together.

Johann Sebastian Bach (1685–1750)

Magnificat D major BWV 243 (with 4 Christmas Interpolations)

Bach came to the Lutheran free city Leipzig in 1723 to assume the position of *Thomaskantor* (Cantor of St. Thomas Church). Bach's duties, as Director of Music, included overseeing the musical activities, not just at St. Thomas Church but also at St. Nicolai Church, *Neue Kirche*, and St. Peter's Church. Prior to this Bach was *Kapellmeister* or *Konzertmeister* (Music Director) at secular courts in Weimar and Köthen between 1708 and 1723, writing mostly keyboard and orchestral music. Unable to reuse his old compositions as is, Bach had to work hard to meet the demands of newly acquired position. The composer was required to write a cantata for every Sunday in the sacred calendar as well as other types of choral music for important religious celebration.

The text of Magnificat comes from the New Testament (Luke 1:46-55) and had been a part of the liturgy in daily Vesper services in the Catholic Church. In Leipzig in Bach's days, the Magnificat was not normally sung but recited using Luther's translation in German. Only on significant holidays — not just on Christmas — Magnificat with original Latin text was sung. Thus, Bach's Magnificat was composed for those holidays on which the fully-orchestrated version of it was required. Today, the re-worked version of Bach's Magnificat in D major, instead of the E-flat major original, is most frequently performed.

The E-flat version includes four Christmas interpolated texts, which seem to have been added later with red ink in Bach's hand to his autograph. Because of the existence of the Christmas interpolations the work was once thought to have been composed for the Christmas of 1723. A recent study, however, suggests that it was written for the Feast of the Visitation. The D major version was indeed created for the same celebration day in 1733 (at that time the four interpolations were naturally dropped). For the reworking of Magnificat Bach transposed the whole piece a half step lower to D major and replaced the recorders with flutes, but the newer version received no heavy alterations. It is not entirely clear why Bach changed the key of the piece. Perhaps the decision was related to the quality (performance level) of musicians available to him. For string and woodwind players the key of D major is simply much easier to execute than that of E-flat major. In addition, the half step difference could make it easier for high voices like sopranos and tenors to sing. Today, the hybrid version of Magnificat — sung and played in D major with four Christmas interpolations — is gaining popularity.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.58

Bach

Magnificat D major BWV243

(with 4 Christmas Interpolations)

Text and Translation

Translation: Pamela Dellal

I. Magnificat (Coro)

Magnificat anima mea Dominum.

I. Magnificat (Chorus)

My soul magnifies the Lord.

II. Et exsultavit spiritus meus (Soprano II)

Et exsultavit spiritus meus in Deo
salutari meo.

II. Et exsultavit spiritus meus (Soprano II)

And my spirit rejoices in God my Savior.

[Einlagesatz A]

Vom Himmel hoch (Coro)

Vom Himmel hoch, da komm ich her,
Ich bring euch gute neue Mär;
Der guten Mär bring ich so viel,
Davon ich singn und sagen will.
[Martin Luther, 1535]

[Interpolation A]

Vom Himmel hoch (Chorus)

From heaven on high I come here,
I bring good news to you;
I bring so much good news
Of which I will sing and speak.
[Martin Luther, 1535]

III. Quia respexit humilitatem (Soprano I)

Quia respexit humilitatem ancillae suae;
ecce enim ex hoc beatam me dicent

III. Quia respexit humilitatem (Soprano I)

For He has regarded the lowliness of His
handmaiden.
Behold, from henceforth, I will be called
blessed

IV. Omnes generationes (Coro)

Omnes generationes.

IV. Omnes generationes (Chorus)

By all generations.

V. Quia fecit mihi magna (Basso)

Quia fecit mihi magna qui potens est,

V. Quia fecit mihi magna (Bass)

For the Mighty One has done great

et sanctum nomen eius.

things for me, and holy is His name.

[Einlagesatz B]

Freut euch und jubiliert (Coro)

Freut euch und jubiliert;
Zu Bethlehem gefunden wird
Das herzeliebe Jesulein,
Das soll euer Freud und Wonne sein.
[Liedtext unbekannter Herkunft]

[Interpolation B]

Freut euch und jubiliert (Chorus)

Rejoice and celebrate;
At Bethlehem will be found
The heart's darling little Jesus,
Who shall be your joy and delight.
[unknown origin]

VI. Et misericordia (Alto, Tenore)

Et misericordia a progenie in progenies
timentibus eum.

VI. Et misericordia (Alto, Tenor)

His mercy is for those who fear Him
from generation to generation.

VII. Fecit potentiam (Coro)

Fecit potentiam in brachio suo,
dispersit superbos mente cordis sui.

VII. Fecit potentiam (Chorus)

He has shown strength with His arm,
He has scattered the proud in the
thoughts of their hearts.

[Einlagesatz C]

Gloria in excelsis Deo (Coro)

Gloria in excelsis Deo!
Et in terra pax hominibus,
bona voluntas!
[Luk. 2: 14]

[Interpolation C]

Gloria in excelsis Deo (Chorus)

Glory to God in the highest!
And on earth peace and good will to
humankind!
[Lk. 2: 14]

VIII. Deposuit potentes (Tenore)

Deposuit potentes de sede et exaltavit
humiles.

VIII. Deposuit potentes (Tenor)

He has brought down the powerful from
their thrones and lifted up the lowly.

IX. Esurientes implevit bonis (Alto)

Esurientes implevit bonis et divites
dimisit inanes.

IX. Esurientes implevit bonis (Alto)

He has filled the hungry with good
things, and sent the rich away empty.

C

7 & 8. DEC 2018

[Einlagesatz D]

Virga Jesse floruit (Soprano I, Basso)

Virga Jesse floruit,
Emanuel noster apparuit;
Induit carnem hominis,
Fit puer delectabilis;
Alleluja.

[Thomas Popel, 1550]

X. Suscepit Israel (Coro)

Suscepit Israel puerum suum
recordatus misericordiae suae.

XI. Sicut locutus est (Coro)

Sicut locutus est ad Patres nostros,
Abraham et semini eius in saecula.

XII. Gloria Patri (Coro)

Gloria Patri, gloria Filio, gloria et
Spiritus Sancto!
Sicut erat in principio et nunc et
semper et in saecula saeculorum.
Amen.

[Doxologia]

[Interpolation D]

Virga Jesse floruit (Soprano I, Bass)

The branch of Jesse flowers,
Our Emmanuel appears;
He takes on the flesh of humanity,
Becoming a charming boy;
Alleluia.

[Tomas Popel, 1550]

X. Suscepit Israel (Chorus)

He has helped His servant Israel in
remembrance of His mercy.

XI. Sicut locutus est (Chorus)

According to the promise He made to
our ancestors,
to Abraham and to His descendants
forever.

XII. Gloria Patri (Chorus)

Glory to the Father and to the Son and
to the Holy Spirit,
as it was in the beginning, is now, and for
ever and ever, Amen.

[Doxology]

Source: I to XI: from Gospel of Luke 1: 46–55
XII and interpolation A to D: under each one

©Pamela Dellal, courtesy Emmanuel Music, Inc.

Balthasar Neumann Choir

Choir director

Detlef Bratschke

Soprano

Anja Bittner
Annemei Blessing-Leyhausen
Heike Heilmann

Margaret Hunter
Karin Gyllenhammar

Agnes Kovacs
Manja Stephan

Chiyuki Okamura
Katia Plaschka

Sibylle Schaible
Christine Süßmuth
Dorothee Wohlgemuth

Alto

Barbara Kozelj
Beat Duddeck-Radons
Petra Ehrismann
Filippo Mineccia
Anne Greiling
Matthias Lucht

Tenor

Nils Giebelhausen
Bernd Lambauer
Mirko Ludwig
Jan Petryka
Christian Rathgeber
Victor Schiering

Bass

Thilo Dahlmann
Stefan Geyer
Friedemann Klos
Reinhard Mayr
Michael Pannes
Ulfrid Staber
Andreas Werner



10月定期公演すべての指揮を執ったヘルベルト・ブロムシュテット(10月13日)

公演報告

2018年

10

月

定期公演

SUBSCRIPTION CONCERTS
IN OCTOBER, 2018

10月定期公演は全プログラムとも

桂冠名誉指揮者のヘルベルト・ブロムシュテットが登場。

モーツァルトとブルックナー、ベートーヴェンとステンハンマル、

ハイドンとマーラーという、古典派とロマン派との邂逅を

精緻な彫琢とみずみずしい演奏によって披露しました。

Aプログラム モーツァルト／交響曲 第38番 ニ長調 K.504「ブラハ」、ブルックナー／交響曲 第9番 ニ短調(コールス校訂版)(2018年10月13、14日、NHKホール) **Bプログラム** ベートーヴェン／交響曲 第6番 ヘ長調 作品68「田園」、ステンハンマル／交響曲 第2番ト短調 作品34(2018年10月24、25日、サントリーホール) **Cプログラム** ハイドン／交響曲 第104番 ニ長調 Hob.I-104「ロンドン」、マーラー／交響曲 第1番 ニ長調「巨人」(2018年10月19、20日、NHKホール)



Aプログラブルックナー《交響曲第9番》。コンサートマスターはライナー・キュヒルが務めた(10月13日)

Bプロではブロムシュテットの母国、
スウェーデンの作曲家ステンハンマルの
代表作《交響曲第2番》をとり上げた
(10月24日)



オーケストラからも
惜しめない拍手が送られた
(10月19日)



Cプロのマーラー《交響曲第1番「巨人」》(10月19日)

